

40年 沖縄復帰 企画作品

沖縄の魂を描く完全映画化!

ひまわりを愛する

幼い少年の夢も、

少女の未来も

一瞬のうちに

奪われてしまった:



映画 ひまわり

～沖縄は忘れない、あの日の空を～



長塚京三 [山城良太 役]



能年玲奈 [城間加奈 役]

賛同者  
吉永小百合さん(女優)  
沖縄の方達が本当の笑顔を取り戻すまで、私たちはしっかりとサポートしなければなりません。「ひまわり」の製作に期待しています。

企画・製作: 桂壮三郎 原案: 「石川・宮森ジェット機墜落事故証言集(石川・宮森630会編)」 脚本: 大城貞俊、山田耕大  
脚本協力: 宜野座由子 監督: 及川善弘 プロデューサー: 本村初枝、森田勝政 撮影: 前田米造 美術: 青木章 編集: 奥原好幸 音楽: 山谷知明 記録: 堀北昌子  
映画「ひまわり」製作委員会: コーゴビジュアル企画・沖縄県映画センター 配給・宣伝: コーゴビジュアル企画  
制作協力: 青銅プロダクション 製作支援: 映画センター全国連絡会議、大阪教映社・中国共同映画社

2011

[9月～12月]  
シナリオ検討会・諸準備  
製作を成功させる沖縄県民の会発足  
全国製作配給上映実行委員会の発足

2012

[1月～6月]  
キャスト決定、シナリオ決定稿、沖縄ロケハン  
[7月～9月]  
撮影(ロケーション、ロケセット、ステージ撮影)

[9月～10月]  
仕上げ作業、編集・音楽・現像関係  
[11月]  
完成披露試写会(沖縄、東京)

2013

[1月]  
劇場公開(沖縄、東京 他)  
全国上映

<http://www.ggvp.net/himawari/>



# 命と平和、そして、日本の未来を問う。

## 映画「ひまわり～沖縄は忘れない、あの日の空を～」

### 待望の映画化!



沖縄県民の4人に1人が犠牲になった、あの悲惨な沖縄戦から生き延びた県民は、今度こそ戦争のない平和な時代を迎え日常の暮らしを守るため一生懸命働いていた。その矢先の1959年6月30日、突然、米軍のジェット戦闘機が石川市(現うるま市)の住宅街へ墜落しジェット戦闘機は民家を押つぶしながら、宮森小学校の教室に炎上しながら激突した。住民6名、学童11名の尊い命を瞬時に奪い重軽傷児154名、住民56名を出す大惨事となった。そこはまるで生き地獄の有様だった。沖縄戦で多くの命を失った県民にとって戦後の子ども達は正に沖縄の希望の星であった。基地さへなければ子ども達の尊い命を犠牲にすることもなかった。それだけに遺族をはじめ県民の嘆き悲しみは尽きることはなく52年たった今日まで続いている。

沖縄の戦後は、はじめに米軍基地ありきであった。その後、サンフランシスコ講和条約等によって日本は独立したが、米軍の沖縄占領は続いた。1972年に沖縄返還は果たされたが、その後も米軍は駐留を続け、今日まで、日米両政府は沖縄に多大な基地を押しつけ県民へ犠牲を強いている。米兵による少女暴行事件、沖縄国際大学へのヘリコプター墜落事件等々危険な基地被害は後を絶たない、なぜ沖縄に基地は必要なのか沖縄の問題は日本の問題であり、平和憲法を持つ日本の平和と戦争の問題でもある。今回の映画製作は基地沖縄の現実を描く入魂作である。

主人公良太には、誠実で思慮ある大人の風貌で定評ある長塚京三が沖縄の悲劇に挑む。沖縄の基地問題で苦しむ女子大生の加奈を演じるのは、CMカルピスウォーター等で人気沸騰中の能年玲奈が演じる。そして、本土と沖縄の一流の映画、演劇人が多数出演を予定している。

監督には、新進気鋭の及川善弘が担当する。撮影監督に「お葬式」「マルサの女」等伊丹十三作品を数多く手がけたベテランの前田米造が担当。企画・製作は「アンダンテ稲の旋律」の桂壮三郎が担当している。

本作は、沖縄復帰40年企画作品として、製作を成功させる沖縄県民の会を発足させ県民創意の映画製作を進めている。又、製作運動は全国に広がり全国各地に製作と上映を成功させる会が作られ活動を始めている。

製作は2012年の7月から9月に撮影を敢行し、完成は12月頃を予定とする。公開は2013年1月より東京・沖縄・大阪での先行上映を行いその後順次全国上映を行う。

#### 呼びかけ人



【鳥越俊太郎氏】

沖縄から米軍基地を全面退去しない限りこうした悲劇はこれからもなくなるならない。“基地被害”の原点のひとつとして映画化されるのを機会に、今一度沖縄のことを考えてみよう。みんなです!



【池辺晋一郎氏】

沖縄を考えることは、すなわちこの国を考えることです。この映画から「真の平和」へ、まっすぐな線が引かれますように!



【佐々木愛さん】

沖縄に、もっと心を寄せてほしい。私は、平和を愛する全国の人々に、この映画への協力を呼びかけたいと思います。

賛同者【海老名香葉子さん・益川敏英氏・安斎育郎氏・池澤夏樹氏・伊藤千尋氏・中沢啓治氏・伊藤真氏・西山太吉氏】(2012年5月10日現在)

## ジェット戦闘機は炎上しながら校舎へ激突した。繰り返される沖縄の悲劇。

【物語】激しい爆音とともに米軍のヘリが沖縄国際大学へ墜落した。事故現場を見た山城良太は、52年前の石川市の空を思い出していた。良太は宮森小学生6年生で仲良しの茂と豊と二年生の一平達と元気に遊び回っていた、良太のクラスに宮城広子が転校してきた、良太の心は華やいだ。青い空の下で沖縄の人々は一生懸命に生きていた。1959年6月30日、突然、米軍のジェット戦闘機が、炎上しながら民家と小学校へ激突した、悲鳴を上げながら逃げまどう子ども達、良太は広子を助けようとしたが既に息絶えていた。校庭には一平の変わり果てた姿があった。それから53年目の2012年、年老いた良太は妻を失い娘の家で暮らしていた。孫である大学生の琉一はゼミ仲間と共に宮森小ジェット戦闘機墜落事件のレポート活動を始めるが、宮森事件の傷跡は今も深く遺族の心を苦しめている。琉一達は基地と平和を考えるピース・スカイコンサートを決意するが、琉一達の前に様々な問題が起きはじめる…。

### 石川・宮森ジェット機墜落事故とは。

沖縄戦の終結宣言から4年後の1959年6月30日、午前10時40分頃、嘉手納基地を離陸した米軍ジェット戦闘機が突然、石川市6区5班、8班(現うるま市石川松島



区)そして、宮森小学校に墜落炎上した(後に整備不良だった事が判明した。)一瞬のうちに学童11名、近隣住民6名(さらに事故の後、後遺症で1名)の尊い命が奪われ、210名の重軽傷者を出す大惨事になった。

#### 映画「ひまわり」製作委員会

埼玉県所沢市小手指南2丁目23番地11号 mail.gogo@ggvp.net  
TEL.04-2968-4385 FAX.04-2995-7911

お問い合わせ

#### 映画「ひまわり」を成功させる沖縄県民の会

沖縄県豊見城市渡嘉敷250番地101号  
TEL.098-856-2155 FAX.098-856-2163

#### 映画「ひまわり」製作と上映を成功させる会

東京都文京区本郷5-20-4ヴィラ・アモン303 映画センター全国連絡会議内  
TEL.03-3818-6690 FAX.03-3811-5914

映画「ひまわり～沖縄は忘れない、あの日の空を～」の制作に御支援をお願い申し上げます。

映画製作には、多大な製作費が必要となります。映画「ひまわり」製作委員会は、製作と上映の成功を確実なものとする為に全国へ本映画の製作協力券を広めていきたいと考えています。1枚1枚の製作協力券の普及が映画完成の保障となります。皆様のあたたかい御支援・御協力を心よりお願い申し上げます。



#### 製作協力券・申込書

◎ご記入の上、お近くの配給会社及び製作委員会へお渡しください。

お名前または 団体名および担当者名			
ご住所 〒			
TEL.		Eメール	
		製作協力券	
		□	
		枚	
		円	

(配給会社)

〒700-0837  
岡山市北区南中央町1番8号  
中国共同映画株式会社  
TEL(086)223-0904

製作協力券の申し込み、心よりお礼を申し上げます。●本映画完成後、製作協力券で全国どこの上映会(有料試写会を含む)でもご鑑賞いただけます。●詳しくはお問い合わせください。

# 再び記憶と向き合う

## 8・5に向かう

オスプレイ反対県民大会

もしあの時、ミルクを取りに行っていたら。うるま市石川伊波の伊波純子さん(63)は、1959年の6月30日进行い出すと身震いする。

当時、宮森小学校5年生。この日はミルク給食当番だったが、テストで授業が長引いていた。先生に「ミルクを取りに行つて」と頼まれ席を立つと、学級委員長が「テストが難しい。先生、あと5分延ばしてちょうだい」と言い出した。延長となり、席に戻った瞬間、爆発の衝撃が体を突き抜

### 宮森小墜落の体験者

### 伊波純子さん

2 (1面参照)



けた。嘉手納基地所属の戦闘機が墜落したのだ。  
5年生の校舎は、戦闘機が激突した6年生の建物の裏側にあつたため、直撃を免れた。ただ、ミルクを取りに別棟の給食室に向かつていたら、無事でいられたかどうかは分からない。

先生は「出るな」と制止したが、教室はパニックと化し、われ先にと校庭へ飛び出した。「戦争！戦争！」と泣き叫ぶ同級生たち。周辺集落は火の海になつていった。「もう家には帰れない」。絶望感に襲われた。  
3年生の妹、1年生の弟を捜そうとするが、大混乱で見付けきれない。腕が切れ、肉が垂れ下がっている子、教頭に抱きかかえられ、米軍ジープに乗せられる子……。どのくらい時間がたつただろうか。駆け付けた母から弟妹の無事を「孫の頭上をオスプレイが飛ぶなんて、やめてほしい」と話す伊波さん。うるま市石川伊波

知らされた。後は記憶がない。

墜落のことは思い出さなくない。同窓会でも模合でも、誰もその話はしなかった。三十三回忌を終えると「もう忘れよう。その方がいいはずだ」と思おうとした。

2010年、「石川・宮森630会」が初の証言集「沖縄の空の下で」を発刊した。読み終えた伊波さんは「宮森の事件がいかに悲惨だったか、初めて知った」と振り返る。同時に「私は生き残ったのに、忘れたふりをして……」。

現在、県内では証言集を元にした映画「ひまわり」の撮影が進む。7月28日のロケで、親や住民のエキストラの群衆に伊波さんもいた。宮森小へ子どもを捜しに来たもの

の、米兵に行く手を遮られるシーンだ。

流血の特殊メイクを施した子役に、53年前の自分たちの姿が重なった。「そんなわが子を抱きしめたいのに、校内に入れてくれない米兵役に腹が立って腹が立って……。小学生の孫たちの顔も浮かんで、どんどん役柄に入り込んでしまったさ」と話す。

53年前と何一つ変わらず、米軍機が飛び交う沖縄の空。そこに危険なオスプレイが加わろうとしている。

「宮森の体験者として、『県外へ』とは言えない。そこで苦しむ人がいるから」と伊波さんは言う。「米軍の輸送機だから、自分の国で飛ばせばいい。何で私たちが預けられないといけないの」。県民大会には初めて参加する。1人でも多くの人が集まることを願いつつながら。(中部支社・磯野直)